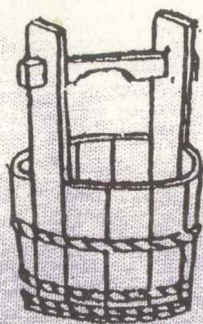
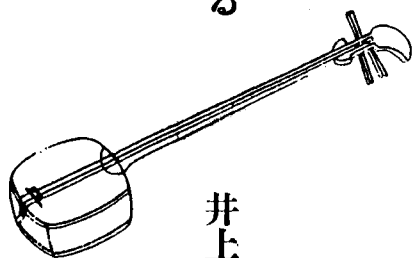




風が吹いたら
桶屋がもうかる
井上夢人



風が吹いたら桶屋がもうかる



井上夢人

集英社



かせ ふ おけ や
風が吹いたら桶屋がもうかる

1997年 8 月30日 第一刷発行

いのうえゆめひと
著 者 井上夢人

発行者 小島民雄

発行所 株式会社集英社
〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10
電話 編集部/03-3230-6100
販売部/03-3230-6393
制作部/03-3230-6080

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 文勇堂製本工業株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛てにお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

©1997 Yumehito Inoue, Printed in Japan
ISBN4-08-774283-0 C0093

風が吹いたら桶屋がもうかる

●目次

風が吹いたらほこりが舞って 7

目の見えぬ人ばかりふえたなら 45

あんま志願が数千人 83

品切れ三味線増産体制 125

哀れな猫の大量虐殺 165

ふえたネズミは風呂桶かじり 203

とどのつまりは桶屋がもうかる 245

装幀・装画／南伸坊

風が吹いたら桶屋がもうかる

風が吹いたらほこりが舞って

「超能力者と同居してる」と言ったときの相手の受け取り方には、大きく分けて四通りある。一つは冗談だと受け取るタイプ。この反応に出会うことが圧倒的に多い。ちょっと笑って、イタズラっぽい目つきになって、首なんか振りながら「じゃあ、お前、まともなスプーン持っていないだろ」なんて言う連中だ。たぶん、これがもつとも自然な反応なんだろう。大多数の健全派とでも言おうか。

二番目は、あからさまに嫌悪するタイプ。どうやら、このタイプの人たちにとっては、超能力だとか超自然現象だとかUFOだとか、そういったものはみんな汚らわしい危険思想であるらしいのだ。彼らはいいて僕を哀れむような目で見返す。僕の頭がどうかしてると思うか、ペテン師にまんまとだまされている可哀想な男だと思うか、あるいはその両方だと思おうらしい。まあ、愛すべき常識派とでも呼ぶべきか。

三番目は、身を乗り出してくるタイプ。興味で眼を輝かせながら「わ、すごい！」と声を上げたりする。半信半疑ながらも、どんなことができるのかとか、あなたはそういう能力はないのかとか、次々に質問を発してくる。どういうわけか、このタイプには女性が多い。テレビの特番愛好派といったところだろう。

そして最後の一つは、これは数が少ないのだが、真剣に思い詰めてしまうタイプなのだ。二番目の嫌悪タイプを裏返しにしたような彼らは、僕の言うことに疑いというものをまったく抱かず「紹介していただけないでしょうか」などと言う。麻生千佳は、完璧にこのタイプの女性

だった。

自動ドアが開け閉めされるたびに、乾いた埃ほこりを含んだ風が吹き込んでくる。たった九坪しかないカウンターだけの店内には、ドアの手前に風除けの衝立つゐだてを置くスペースもなく、客たちはみな、吹き込む埃から両手で井をかばいながら懸命に牛井を食べていた。

春一番なら半月も前に吹き荒れた。春二番……そんな言い方は知らないし、この風をどう呼べばいいのだろう。店の中から眺めていても、駅前で配っていたチラシが、時折くるくると舞い上がりながら横断歩道を渡っていく。

彼女は、そんな日の午後、風に吹き寄せられたようにして店へ入ってきた。まばらな客を見回すと、スカートを払うようなしぐさをして、彼女はカウンターの一番禺へ腰をおろした。

「もう、髪がぐしゃぐしゃだもの」

なにかに言い訳するような口調で、彼女は僕を上目づかいに見た。

「いらつしやい。ひどい風ですね」

カウンターにお茶を出し、僕は彼女にうなずいてみせた。

「牛井ください」

言われなくても、この店には牛井しかない。並か、大盛。あとは味噌汁と、お新香。メニューは単純で明快だ。そのかわり、客はカウンターの前に座ってから牛井が出てくるまで三十秒と待たされることはない。

「あのう……」

井が運ばれるのを待ちかねたようにして、彼女は僕に声をかけてきた。

「はい？」

「あなたでしたよね、この前、超能力のこと話してらしたの」

「……………」

あらためて彼女を見返した。

学生っぽい雰囲気だった。坂の上に女子大があり、その向こうには美術学校がある。そのどちらかに通っているのだろう。この店の客の大半は学生だった。

「ごめんなさい。この前、お客さんと話してるのを聞いてたの。超能力を持ってる方と一緒に住んでらっしゃるって。あなたじゃなかった？」

「ああ、僕ですよ」

「今も、その方と一緒に？」

「ええ、同居人は二人いますけど、一人がそういう特技の持ち主で」

一人いれば充分だ。あんなのがウジャウジャいたら始末におえない。

「その方、どういう超能力者なんですか？」

「どういうって……」

彼女は、運ばれた井に手をつけようともせず、カウンターの上へ伸び上がるようにして僕を見つめる。

「いろいろ、ほら、あるじゃないですか。スプーンを曲げるとか、触らないでものを動かすとか、念写とか、透視とか」

「ああ」

と、僕は奥の厨房^{ちゅうぼう}へ目をやった。午後の三時を過ぎたばかりで、店は一番暇な時間だった。店長は、鍋の向こうのスツールに腰を下ろし、週刊誌を読んでいた。

「いろんなこと、やってますよ。ひと通り、練習したりしてるんじゃないかな」

「ひと通り？ なんでもできるの？ その方」

「その方、ってほどのヤツじゃないけど……そういうの好きなんですか？」

「好きっていうか、もし、できるんだったら、お願いしたいことがあるんです」

「お願い？ なにを」

「あのね、前にテレビで観たことがあるんだけど、振り子みたいなもので、場所を探したりするの」

「振り子？」

「紐^{ひも}の先に重りがついててね、矢尻みたいな格好の重り。それを地図の上に垂らして、探してるものがどこにあるか当ててるの」

「……………」

たしかに、超能力の中にダウジングと呼ばれるものがある。鉱脈を探し当てたり、失せ物を見つかったりするのに、振り子を使うのだ。

「なにか、探してるわけ？」

「ええ、そうなの。行方不明になった人がいるんだけど、そういう方なら、どこにいるか見つけてもらえるんじゃないかと思って」

「……………」

僕は、苦笑して相手を見返した。

「だめでしょうか？」

「いや、ヨーノスケは——まつしたようのすけ松下陽之介まつしたようのすけつてのが同居人の名前なんだけど——人捜しなんてできるとは思えないな。だいたい、あいつの超能力つてのは、人の役に立ったことなんて一度もないんだから」

「でも」と、彼女は唾を呑み込むようにして言った。「それは、そういうチャンスがなかったからなんじゃないの？ やってみれば、できるかもしれないでしょう？」

「どうかなあ……あいつの超能力つて、かなりレベルが低いんじゃないかって思うんだけどね」

「試してみるべきだって、思いません？」

「思いません、と言いたところだったが、それを言わなかったのは理由が二つあった。一つは、こういう余興も楽しいかもしれないと思ったからで、もう一つは、彼女がいわゆる美人に属していることに気がついたからだった。」

麻生千佳というのが彼女の名前だった。

「男、三人で住んでるの？」

仕事が出てから、千佳と待ち合わせ、僕は住まいに彼女を案内した。これを家と呼んでいいものか、僕にはわからない。

「倉庫みたい」と、千佳は外側から見た感想を言った。

「倉庫だったんだ。以前はね。ヨーノスケのオヤジが工場をやってたころ、ここはれっきとし

た倉庫だったらいい。工場は売っぱらったけど、この小さな倉庫をヨーノスケが気に入って、住むからくれと頼んだらしい。それで、学生時代から彼はここに住んでる」

「へえ……」

まるでポンペイの遺跡でも見学するみたいにして、千佳は、その汚らしい元倉庫の外観を眺め回した。

引き戸に手をかけたとき、千佳が僕の腕をつかんだ。

「あとのお二人、いるの？」

「明かりが見えるし、鍵がかかってないところを見ると、少なくとも一人はいるんじゃない？」

「なんだか、緊張してきちゃった、あたし」

僕は、彼女に笑ってみせた。

「二人とも変なヤツだけど、悪い人間じゃないから安心していいよ」

「ねえ、ほんとにここに、男三人で住んでるの？」

「そう。僕とイッカクは居候だけだね」

「そのイッカクさんって……」

「まあ、入ろうよ。こんなところで風にさらされてても、埃まみれになるだけだし」

「あ……うん」

千佳は、手に提げていたビニールのバッグを胸に抱きかかえるようにしてうなずいた。

「ただいま」

中に入ると、ヨーノスケとイッカクが同時にこちらを振り返った。千佳を連れているのを見

て、ヨ一ノスケはポカンと口を開け、イッカクは値踏みするような目で彼女を眺めた。

「麻生千佳さん」

玄關代わりの簀の子^{すのこ}の上で靴を脱ぎながら、僕は彼女を二人に紹介した。

「はじめまして」

千佳も僕にならって、ドギマギしながら靴を脱ぐ。勧められるまま板の間に敷いたカーペツトに腰をおろしながら、千佳はめずらしそうに部屋を見回した。

元倉庫の中は、一応、四つのスペースに区切られている。三人それぞれのプライベート・スペースと共同で使っているダイニングのスペースだ。ただ、訪ねてきた人間にはそのスペースの区切りが見えない。仕切りのカーテンレールが天井に這わ^はせてあるのだが、面倒くさくてカーテンを引かなくなり、レールはいつの間にか天井の色に紛れてしまった。申しわけ程度の流しとコンロと冷蔵庫と食器棚を置いたコーナーが、かろうじてダイニングを思わせる。あとは、三人それぞれのコーナーにそれぞれの机が置いてあるだけだ。とにかく、中に入っても、ここは倉庫でしかない。ガランとなにもない倉庫。

「紹介するよ」僕はなんとなく照れながら千佳に言った。「この蒸しアンパンみたいな男は、両角一角。両方の角、一つの角——なんて変な名前だけど、親がつけた真正正銘の本名。モロズミイッカクと僕たちは呼んでるけど、ほんとうはイッカクじゃなくてカズミと読むらしい。カズミってイメージじゃないよな」

言うど、ヨ一ノスケが肩をゆすって笑った。イッカクは笑わなかった。

「麻生千佳です。よろしくお願いします」

「君」イッカクが真正面から見据えながら千佳に言った。「君、夕食は、すませましたか？」